

# 第31回市民読書感想文コンクール

## 入賞者・最優秀作品紹介

一般の部、高校生の部合わせて二十七編の応募がありました。いずれも力作ぞろいでしたが、審査の結果、次の方々が入賞しました。ご応募ありがとうございました。

### ○一般の部

#### ▽優秀賞

- 松橋千香子さん (松 木)
- 岡本由佳里さん (八幡沢岱)
- 達子 潤さん (部 垂町)
- 齋藤ひとみさん (十二所)

#### ▽佳作

- 畑沢貴美子さん (川 口)
- 木村 裕子さん (片山町)

※最優秀賞は該当作なしです。

### ○高校生の部

#### ▽最優秀賞

- 岩沢 和美さん (鳳鳴高校2年)

#### ▽優秀賞

- 仲沢 幸樹さん (商業高校3年)

#### ▽佳作

- 秋庭 舞衣さん (商業高校1年)
- 小笠原由佳さん (商業高校3年)
- 佐藤 眞介さん (商業高校3年)
- 清水水斐佳さん (商業高校1年)
- 川連 千明さん (鳳鳴高校2年)
- 山内小夜子さん (商業高校2年)
- 柴田 優美さん (商業高校3年)
- 工藤 大幸さん (商業高校3年)



鳳鳴高校2年 岩沢和美さん

### 高校生の部 最優秀作品

#### 『いころ』を読んで

「先生は果たして本当に不幸であつたのだろうか」読後、こんなことを思った。先生の生涯は一見して友人Kを裏切ってしまった罪を背負い続け、その罪に対する苦悩の末、自殺して償うという、幸せなど一つもなかったかのような暗いものに思われる。ただ、疑問もそこで生まれる。「人間の醜さ、不器用さ、不完全さを知らずに、生まれたままの純白の色で生きていくのは、幸せか不幸か」という疑問だ。登場人物の先生、友人K、御嬢さん、そして「私」は、ここにおいてそれぞれ異なっていた。先生とKの場合、どちらも「自殺」という暗い影に覆われて、私

には結局わからなかった。ただ、人間の心の中に存在するもの全てを経験したという点では、先生は内面的に幸せという部分もあつたかもしれない。御嬢さんの場合、人間的にはとても不幸だと思つた。ただ、本に書いてある通りに「性」によって立場を変える」と、女性であることや、そういう人生が信頼しきつていく夫に与えられたものであることからすれば、彼女なりに幸せだったかもしれない。Kの死が先生にもたらしたものは何だつたのだろうか。先生はKの自殺後、しばらく時間が経つてから、Kの自殺の原因は、自分のようにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつたことにあるのでは、と疑い出した。Kの死は結果的に先生を罪を負つた運命へと押し込めてしまった。しかしKは、自分がこの世から消えることで、御嬢さんの幸せ、そしてそれは先生の手でつかんであげてを少なからず望んでいふと思う。

先生はKの思いに反して、Kと同じ路を、同じように辿っているという予覚を感じ始める。そしてそれは現実になった。Kに対する裏切り、そして何も知らない妻の

自分に対する態度が、Kと同じような、一人ぼっちで淋しい、孤独な気分させたのかもしれない。先生は、Kの自殺によって、勝利者となり、そしてある意味で敗北者となった。だからといって、Kも勝利者であつたのかというと、決してそうではない。結局みな、不可能だつたのだと思う。先生がお嬢さんを幸せにするのも、Kがそうするのも、そして先生とKが互いにより理解者であつて、尊敬し合う関係をずっと続けていくことも、である。私はここで、人は人生の不可能を可能にすることは不可能であること。つまり運命というものの存在を感じてしまった。先生はKの死の後、自分の中に醜さとずっと戦つていた。それは元々あるものだから当然消し去ることはできない。だから先生は世間に出て行かなかつたのだらう。自分の意志からではなく、自分の醜悪さに対する恐怖心や罪悪感からの大きな力がそうさせたのだと思う。それは先生の先の人生をも握りしめて、先生を動かさなかつた。先生は、そんな個人的な動機と、「明治の精神に殉死」という動機を持ち合わせて、自ら命を絶つた。私はこのことが、見おかしなようで、でも何だか妙に人間らしい感じもした。そして、こういう動機でなければ、先生は自分で死ねなかつたのだらうとも思つた。つまり、これで生きることから逃